

福岡市
金武古墳群発掘調査報告
— 1、2号墳、近世墳墓の調査 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集

福岡市教育委員会
1971

序 文

近年、福岡市および周辺地域の開発にともなう、各種造成工事の激増ははなはだしいものがあります。ここに報告します金武古墳群もその例にもれず、宅地造成のために止むなく記録保存のための、緊急調査を実施したものであります。

当委員会では、今後も文化財の保護と活用のため、努力する所存でありますので、市民各位の御協力をお願いいたします。本書が各位の郷土に対する認識と理解の資料として、御利用いただけますなら幸甚であります。

本遺跡を調査いただいた九州大学考古学研究室および関係各位に対して深甚の謝意を表します。

昭和46年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 豊島延治

調査関係者

調査委託者 重松哲生

調査員 松本肇 佐田茂（九大） 萩野知則 野田拓治（国学院大）

調査指導員 鏡山猛（発掘担当者） 岡崎敬 森貞次郎 小田富七雄

協力者 株式会社松本組 牛尾慶祇

教育委員会 豊島延治 大歳富繁 青木崇 清水義彦 石橋博 岩下拓二

野上淳次 三宅安吉 山口俊二 下条信行 柳田純孝

塙屋勝利 折尾學 田坂美代子 徳永照代 三島格

（なお、本書の作成に関しては、佐田茂、松本肇、三島格があたり、内容に関しては、佐田茂、松本肇が一切の責任を負うものである。）



目 次

I	調査の経過	1
II	調査の概要	1
III	地形と環境	3
IV	1号古墳	4
	1、墳丘	4
	2、内部構造	4
	3、遺物	10
V	2号古墳	11
	1、墳丘	11
	2、内部構造	12
	3、遺物	14
VI	1号墳墓	13
	1、外部構造	13
	2、内部構造	13
VII	2号墳墓	15
	1、外部構造	15
	2、内部構造	16
	3、遺物	16
VIII	5号墳墓	16
	1、外部構造	16
	2、内部構造	17
	3、出土人骨	18
IX	近世墳墓について	18
X	おわりに	20

I 調査の経過

住宅造成（金武団地）の申請により、昭和45年3月29日宮小路（県文化課）および田坂、三島らが、事前に現地（大字金武字浦江谷ノ84番地外）を踏査した。

その結果、舌状に派出した低丘陵上に、古墳2基と板碑（無銘）などの存在を確認した。

上記の結果を答申の後、宅地造成前に国費の補助を受けて、発掘調査を実施することになり、別記の調査班が編成され、昭和45年8月6日から、8月20日まで、発掘調査が行われた。

調査にあたっては、所有者重松哲生氏および株式会社松本組の各位からは種々の御厚意を得、牛尾慶祇氏は期間中宿舎を提供された。特記して感謝の意をあらわす。

II 調査の概要

調査の対象となつたのは2基の円墳と板碑状の造構1基であつたが、丘陵上を踏査の結果、板碑状造構を含めて5基の近世墳墓が発見されたので、調査可能な3基と2基の古墳の調査を行つた。

調査はまず古墳の調査をやることにし、松本謙、野田拓治が1号墳、佐山茂、豊野知則が2号墳を担当した。1、2号墳とも既に開口しており、石室は露出していた。

1号墳は径15m、高さ2.3mの円墳で、横穴式石室は南に開口している。調査以前の状況からみて盜掘を受けていることははつきりしており、余り期待出来なかつた。調査は石室内部の清掃から始めたが、浮き上の中から須恵器片が出てきて床面に残っている可能性はほとんどなくなつた。玄室のプランは長方形を呈し、天井までの高さ2.3mで、三壁を構成する石積みも、下段に腰石を用い、割合い大きな石を使用している。それに比して玄道部は簡単なつくりで、方向もすこし東にずれている。玄道先端には石を立てて閉塞をしている。それに続いて墓道が次第に拡がりながら墳端まで続いている。墳丘の状況については調査期間の関係上、縱横のトレンチしか入れることができなかつたが、墳丘中段に2列の列石があつた。

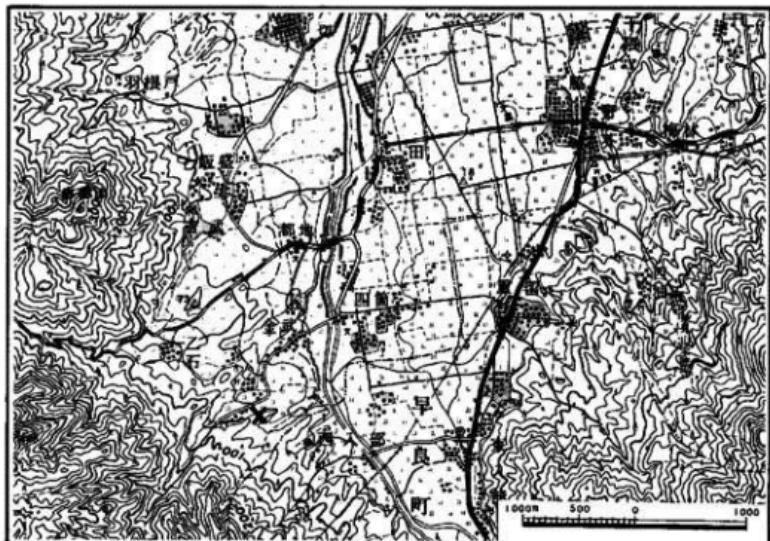
2号墳は1号墳のある丘陵の先端部近くに位置し、墳丘の規模も小さい。調査以前に墳丘中心は大きくくぼんで、石室は完全に抜かれているのではないかとさえ思われた。保存状態が非常に悪く期待できなかつたが、掘り進みると、腰石だけはかろうじて残っていた。石室は両袖式で、割石による閉塞が基底部のみであるが認められた。石室は全長3.45m、

玄室の奥行1.95m、幅1.73m、羨道の長さ2.05m、幅0.83mで、玄室と羨道の長さがあまり変わらない。墳丘全体に竹がおい茂り、調査は伸び進まず、結局墳丘の調査を行なうことできなかつたのは、緊急調査の宿命ともいえよう。調査員自身反省しなければならないことである。

1号墳の周辺に5基の近世墳墓がある。1号墳の西の高所にある1号墳墓は列石を円形にめぐらし、その中央に立石が立っている。当初板碑状のものであると考えていたが、調査の結果、早急な結論をさしひかえなければならないような状態を示している。5号墳墓は地表には1号墳墓と同様の遺構が認められたが、土塙中から人骨が発見され、墳墓であることが明白となつた。

丘陵上に後期古墳と近世墳墓が交錯していることは必ずにしてあることであるが、近世墳墓の調査はほとんど行なわれていない。しかしながら近世史研究の一方法として考えてよいのではなかろうか。

夏の暑い中での調査にもかかわらず1人の事故者もなく無事終了し、8月20日解散した。

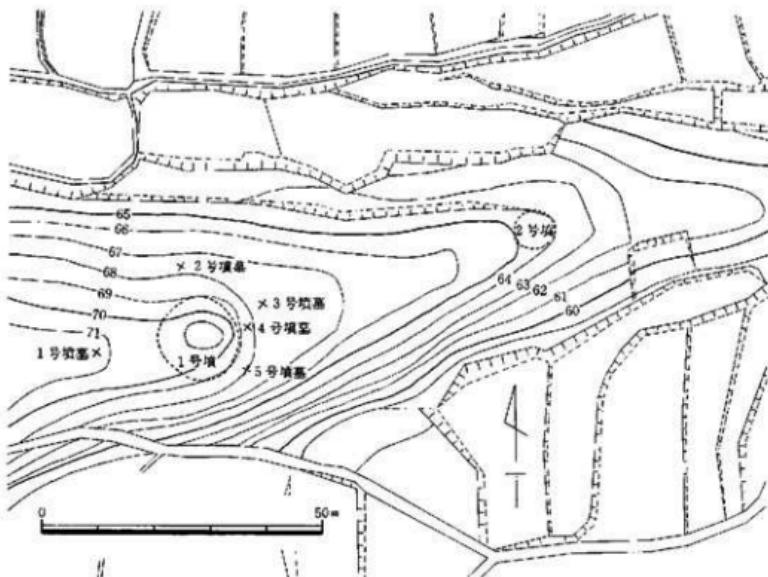


第1図 金武古墳群周辺図

III 地形と環境

金武遺跡は、福岡市大字金武浦江谷の84番地外にある。三方を背振山（標高1055m）、油山（標高592m）の、両山系の支流にあたる丘陵地帯にかこまれた早良平野の、最も奥まったところに金武の部落がある。遺跡は、この早良平野をうるおし、博多湾にそそぎこむ室見川の西岸の台地上に位置している。2基の古墳と、5基の近世墳墓とに形成された遺跡であり、近年まで墓地として使用されていた。金武部落より、東を一つ越すと、西は糸島平野であり、南は佐賀県へと通じており、福岡市の西南のはずれである。しかしながら、早良平野は、伊都國と奴国との間に介在する重要な位置とされており、弥生前期頃からすでに生活の舞台として展開されている。

遺跡の位置する台地より、平野を見下ろすと、弥生時代の溝状造構や古墳時代の住居址等を発見した有田遺跡。人面鋲出銅戈を出した白塔遺跡。古墳時代の箱式石棺より神獸鏡



第2図 金武古墳群関係図

① を出した五島山古墳。同じく箱式石棺より鳥文鏡を出した重留遺跡。現在伊勢神宮歴古館に
藏する装飾付器台の発見地である羽根戸遺跡。他に、羽根戸、林原、ムカシ、長谷等の古墳
群^⑤、生活遺跡等が数多く存在し、はるか前方の海岸線には、元寇防塁などもある。

註 ①～⑤「有田遺跡」1968

⑥ 亀井明徳「福岡市五島山古墳と発見遺物」『九州考古学』38 1970

⑦ 福岡市教育委員会「埋蔵文化財地名表」第1集 1969

⑧ 福岡市教育委員会「元寇防塁発掘調査報告」1968、1969、1970

IV 1 号 墳

I 墳丘（第3、5、6、7図）

この古墳は、すでに開口されていたが、墳丘はそれほど変更されたあとはない。墳径15m、高さ2.3mを計る円墳である。墳丘の構造をみるために、玄室の中央部を交点として、ほぼ東側、西側、南側と三方向にトレンチを入れた。西に傾斜をもつてのびる、舌状台地の地山を平坦に削り整地を行い、8層よりなる盛り土を行って墳丘を築造している。

まず石室をもうけるために、地山を深さ30～40cm掘り込み掘り方を作り、玄室の三壁の腰石の根本には、根じめ石として、大きめの礫をうめ込んだ後に、土を積み込んでいる。墳丘の盛り土内では、石室より約3m及び約4mの地点において、それぞれ一段づつの列石を検出した。これらの列石は、階段のように、大きな石により二段積みになっており、石室のまわりをとりまいている。このことは、墳丘構築時に封土の崩壊と、土砂の流失を防ぐための上留めにしたもので、石室の石材を積み、盛土を行うことと、交差していく途中で施こし、最終的には、墳丘の封土の中にうめこんだような状態になっている。墳丘の元来の高さは天井石の厚さを計算に入れても、3mを若干越す程度であろう。また葺石や周濠、ハニワ列等の外部施設は一切みあたらぬ。

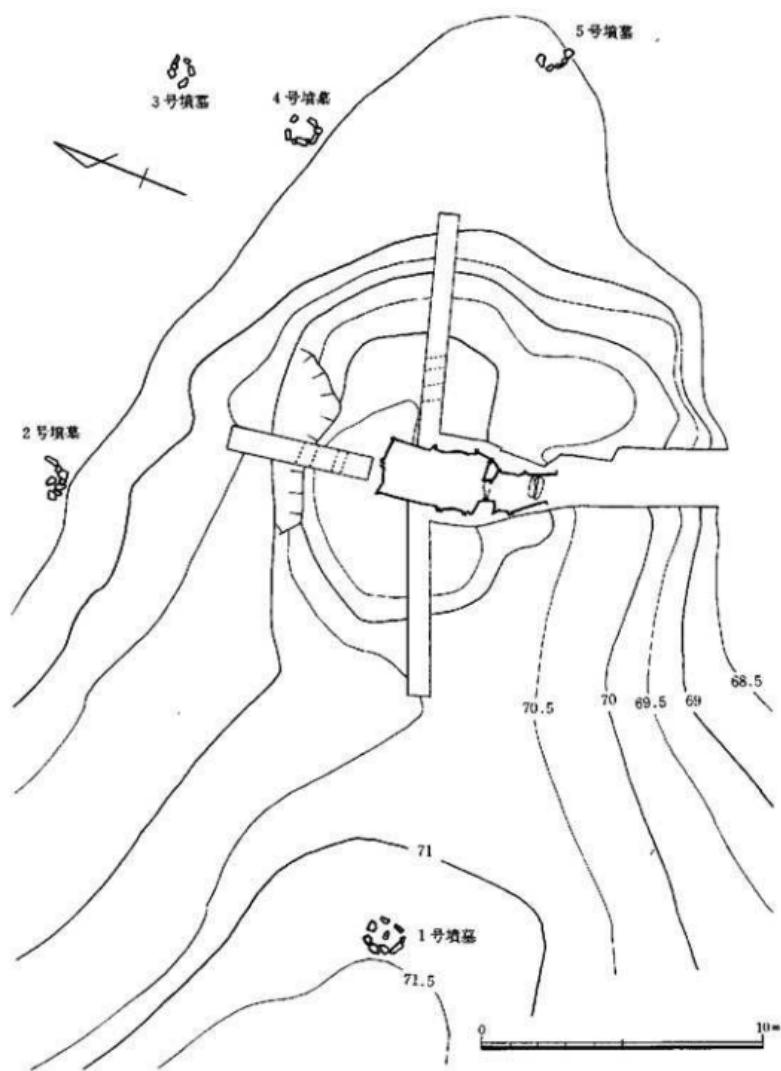
2 内部構造（第4図）

すでに石室は開口しており、天井石その他の石も持ちざられてすでになく、床面もかなりあらされているようであった。

石室はには墳丘の中心部にあり、幅約2m奥行き3.6mの長方形の玄室と、幅1.3m、長さ2mの狭道を有す、S14°Eに主軸をとる横穴式石室で両袖式である。玄室の高さは現在奥壁で2.3mを計るが、その上に天井石がのつていたと思われる。

底部には巨大な石を多く用いて腰石としている。特に奥壁には大きな石を立て、上部に行くにしたがい、細長い石の小口を内側に向けて使い、しだいにせりださせて、天井石がうまくのるようにしている。全体的に床面に対して垂直に積んでいるが、天井部に近づくと急にせりだしている。そのために上部では細長い石を用いたものと思われる。床面には敷石をしていたかもしれないが、破壊がはげしくて不明である。

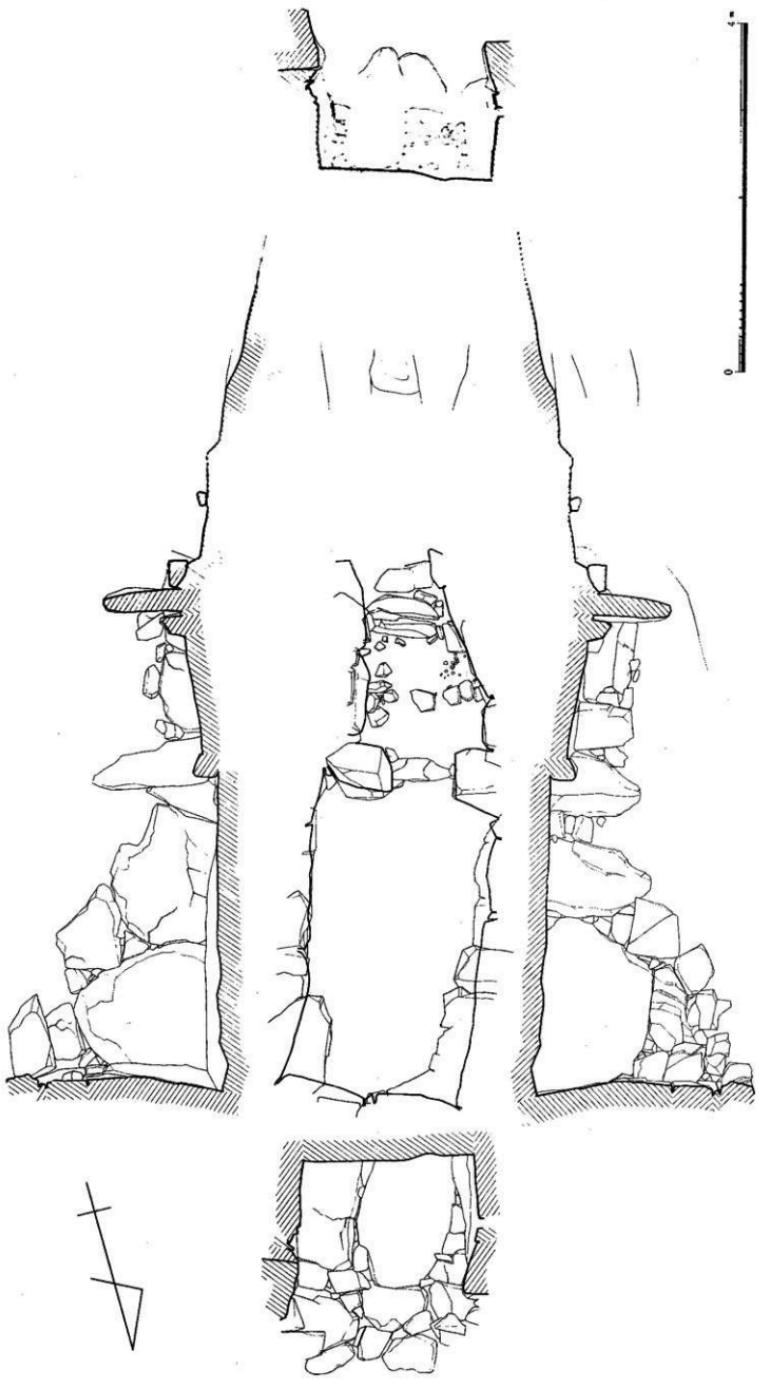
玄門の袖石の間には、幅30cm、長さ70cmの石を狭道との間仕切のために、設置している。



第3図 1号墳墳丘測量図

第4圖 1號塊石密實剖面圖

- 6 -

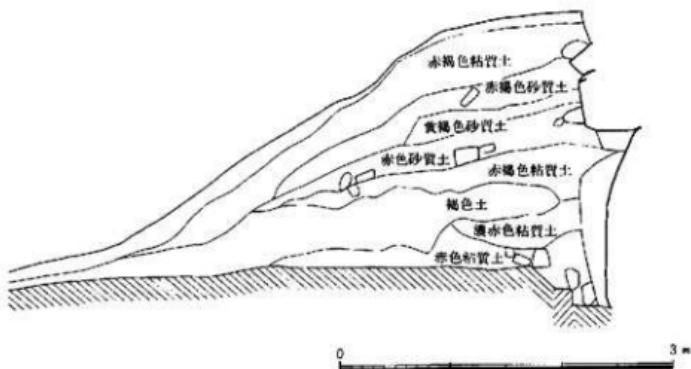




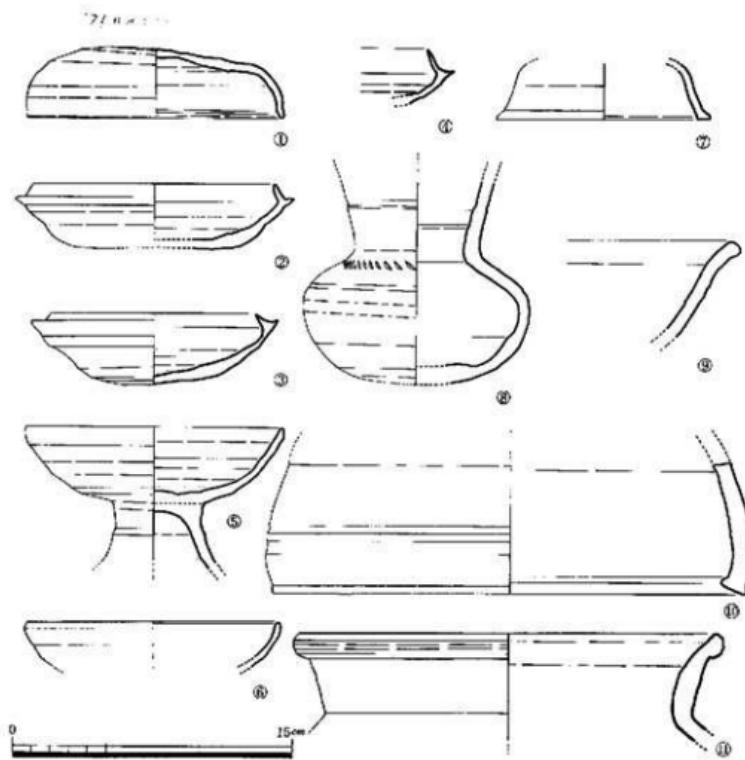
第5図 1号墳墳丘東側トレンチ土層図



第6図 1号墳墳丘西側トレンチ土層図



第7図 1号埴埴丘北側トレンチ土層図



第8図 1号墳出土須恵器実測図

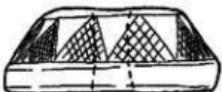
玄室の床面と狭道の床面とは20cmの高低差があり、狭道の方が高く、狭門の方へ行く程高くなっている。

狭道部は、狭門に向かって狭くなり、造り方も粗雑であるが、高さ90cm、幅85cmの大石を立てて閉塞石としている。その先には、墳丘の裾まで3.00mの長さで墓道が続くが、閉塞石から2.40mの所より、幅50cm、深さ11cmのV字状を呈した溝をつくり、排水の用をなしている。

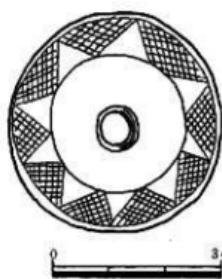
遺物は、石室内に流入した土砂に混じって滑石製紡錘車1個と須恵器片を少量検出したのみであり。ほとんどの遺物は、狭道並びに墓道の表土近くより出土したものである。

3 遺物 (第8図)

杯蓋 (1)は口縁径13.4cmで砂粒を含む。天井部には巻き上げの痕が残り不整形である。内外面は横ナデにより調整しているが、天井部外面のみヘラ削りで仕上げている。口縁端は削りにより浅く凹線がはいる。



杯身 (2)、(3)、(4)である。口径に比して、全体的に浅く、立ちあがりも低く内傾している。砂粒を含むが、焼成は良い。横ナデで調整をしているが、不整形である。(2)は口径13cmあり、受部には削りにより凹線がはいる。(3)は、口径11cmあり、立ちあがりの内傾度が急で、受部も短かく、外上方を向いている。(4)は、比較的立ちあがりが長く、受部も水平である。外面にはヘラ削りをほどこしている。



第9図 1号墳出土筋錐車

高杯 (5)、(6)である。口径

は共に13.6cmあり、手法

もよく似ている。(5)は杯

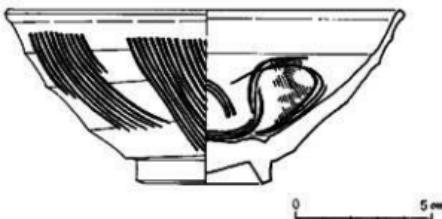
部と脚部とを別々に作り

接合している。内外面共

に横ナデ調整を施してい

るが、杯部下底の内面に

は、接合時の指圧痕をの



第10図 1号墳出土珠光青磁碗

る。外面には、ヘラ削りをしたのちに櫛状のものでなでている。脚部は裾の方で急に広がりを持つと思われる。

台付碗 (7)はその脚部であると考えられる。裾の方に行つてやや外反し、端部では引き伸ばしにより、断面三角形の面をとる。横ナデにより仕上げている。器形はカップ状となるだろう。

長頸壺 (8)は口縁部と底部をすでに消失している。全体的に肉厚であり、純重な感じがするが、焼成は良好である。肩の部分の周りには櫛による突刺文を施こし、胴部中央よりやや上で、最大径を持っている。底部はヘラ削りで仕上げている。

器台 (9)、(10)は胎土、焼成等同一であり、もともと同じ固体のものであったと思われる。途中の部分を欠失しているため復元是不可能であるが、かなり大形の器台になる。受

部口縁は外反し、丸味をもつ。口径は不明であるが、浅いものである。脚部は内凹し、脚端部は内外共に引きのばしを行っている。内面は粗い簡で仕上げている。脚端より7cmのところに透しがある。透しは、底辺5cm内外の三角形であろうと考えられる。窓(10)は、口径22cmである。口頭部は外反し、厚く、口縁を引きのばして折り返している。内面は横ナデで調整し、端部外面は彫削りで凹線を付けている。最終的に端部下に指を当てて整えている。

1号墳出土の須恵器は6世紀後半に通有なものである。

筋輪車（第9図）滑石製によるもので、黄褐色を呈している。高さ1.5cm、上底2.5cm、下底3.8cmで、中央に0.7cmの孔を有する台形状のものである。斜辺には格子状の文様を施している。この種のものは、6世紀代末の古墳から出土例を多くみる。ガラス玉 長さ1.09cm、径1.05cmを計る。紫色を呈し、縦にしまが入いるが、作製時の気泡によるものである。孔は両面から穿孔され径0.3cmあるが、一方がやや広い。

珠光青磁（第10図）

幕道上の表土中より出土したものである。口縁径14.4cm、器高6.5cmある。脚部がわざかに張り、小さく締めた高台が付いた、浅い平らな茶碗である。

素地は、灰白色の堅い磁質である。この上に透明の釉薬をかけているが、腰部以下は露胎のままである。器面は淡い青色を呈している、外面には、筒でひつかいたいわゆる彫搔き文があり、内面には、四方に線刻による基形を刻し、その中に輪目をじぐぎぐに押した文様を刻している。

珠光青磁は、南宋時代に製作されたものである。我が国に渡來したものは、福建省の同安で作られたものと、泉州の碗窯郷で作られたものとのどちらかであろうといわれている。

鎌倉時代に多く輸入され、鎌倉海岸や太宰府を中心とした福岡地方、筑後地方等に多くの出土例をみると。このことは当時の政治の中心地或いは、对外貿易港などと関係があると考えられる。

この古墳の表土からの出土であるということは、後世、蓋前に供して、法要を行ったものである。

珠光青磁に関して小山富士夫氏の御教示を得たことをここに記し謝する。

V 2号墳

I 墳丘(第11図)

1号墳の北東約50mのところ、丘陵の先端近くにあり、わずかに傾斜した丘陵上に位置する円墳である。墳丘の径は約7.50mをはかり、現在の高さは約2mある。墳丘は中央部が大きくくぼみ、築造当時の姿ではないが、墳丘そのものの高さは、現在の高さに若干プラスする程度のものであつたと考える。

2 内部構造(第12図)

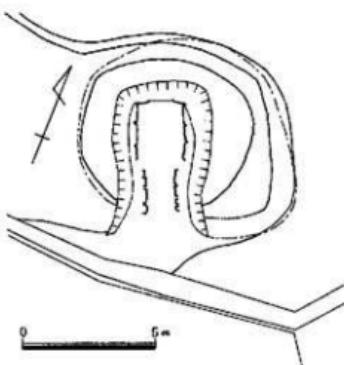
墳丘の中央くぼみとほぼ同程度の石室を内部主体としている。南に開口する横穴式石室は石を抜き取られ、わずかに基底部を残すのみであった。

石室の規模は、玄室奥行2.30m、幅1.73m、羨道長さ2.05m、幅0.85mである。玄室のプランは長方形で、それに長くはない羨道がつくという形式である。石室の様式は1号墳と同じく両袖式であるが、プランは2号墳の方が整っている。

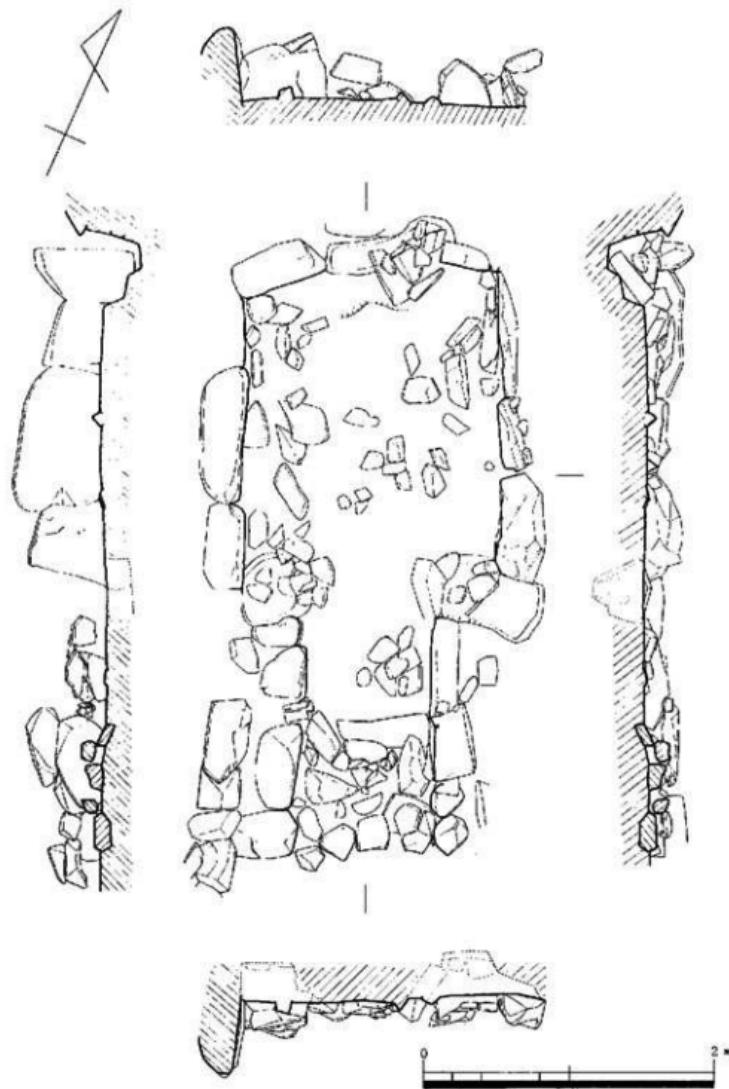
石積みは腰石だけしか残っていないので全体を見ることはできないが、割合い薄い石を横に並べている。袖石は両袖とも抜かれてしまっていたが、そこだけ一段と深く掘り、割石をつめてその上に石を立てていたようである。なお床面には当初敷石があつたと考えられるが、調査時には玄室全体に塊石がばらついており、本来の姿はとどめていなかつた。しかし状況からして全体に敷石があつたと見るべきである。

羨道も玄室と同様の残存状態で、石積みにも変化はない。ただ注意することは、西壁の先端部裏間に3個の石が並んでいることである。おそらくは側壁補強のためであろうと考えるが、はつきりしたことはわからない。羨道の中程から入口にかけて塊石を使用した閉塞が認められる。幅は88cmを計る。その両端基底部には他に比して大きな石が一列に並べられている。

石室の構造そのものは、残存している石組みの様子からして、割合い貧弱なものであつたことがしのばれる。



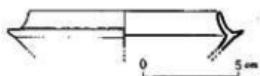
第11図 2号墳墳丘測量図



第12図 2号墳石室実測図

3 出土遺物

遺物は全然残っていなかつたと言つた方がよい。わずかに浮き土中から土師器の小片が1片発見されたのみである。小片のために器形、様式などについては全然わからない。たゞ2号墳前の芋掘から須恵器片を採集したが、その中に第13図のような杯身の破片があつた。杯はIV型式に統するものであり、おそらくは石室内からのかき出しであろうと考える。



第13図 2号墳附近表採須恵器

VI 1号墳墓

I 外部構造（第14図）

1号墳の西約10mのところ、割合い平坦な地にある。中央に花崗岩の立石があり、その周囲を径約1.30mに石がまわっている。列石の中には無難作に石をのせて、全体の形は半球状を呈する。立石はほぼ中央にあり、前面は平らで、裏面は丸みをもつていて、形としては、いわゆる江戸時代以降につくられる板碑としては、形のくずれたもののような感じがある。もちろん板碑としての銘文はないし、行そのものには造作は加えられていない。

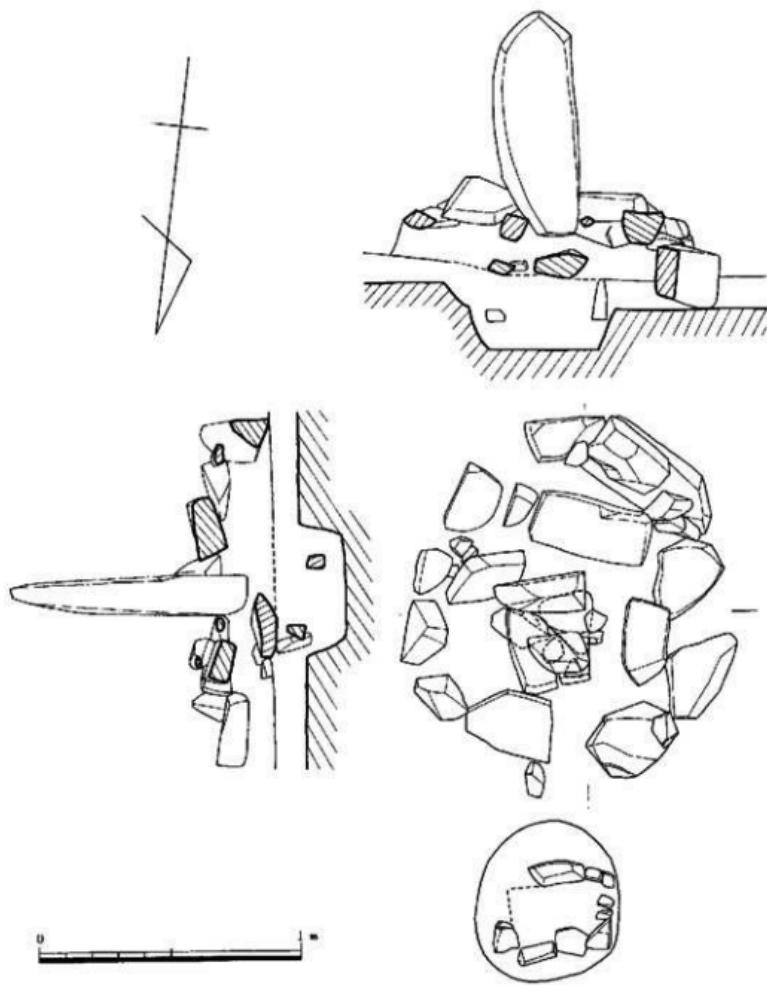
立石を取り巻く環状の列石は不整形な石を使ってほぼ円形にしている。その中に石をつめ若干の盛り上がりを見せている。

5基の近世墳墓では一番形を整えている。

2 内部構造

平坦な旧地表（腐植土をすこし含む淡黒褐色土層）の下に地山（赤色砂質土層）がありその地山をほぼ円形に掘りくぼめている。掘り方は約60cmの円形プランを呈し、深さは旧地表より30cm、地山より20cmをはかる。円形の土括の中には塊石を用いて東西45cm、南北36cmの方形の石囲いをつくっている。石囲いは北西部を欠失しているが、石囲いそのものは簡単なつくりである。石囲いの上には旧地表面に数個の石を置いているが、蓋としての用途は全然なさない。

内部構造の性格については不明であるが、火葬骨を容れるためのものとしては充分用をたす。地上にあらわれている遺構との関連もあるが、後章でのべることにする。なお出土遺物は全然発見されなかつた。



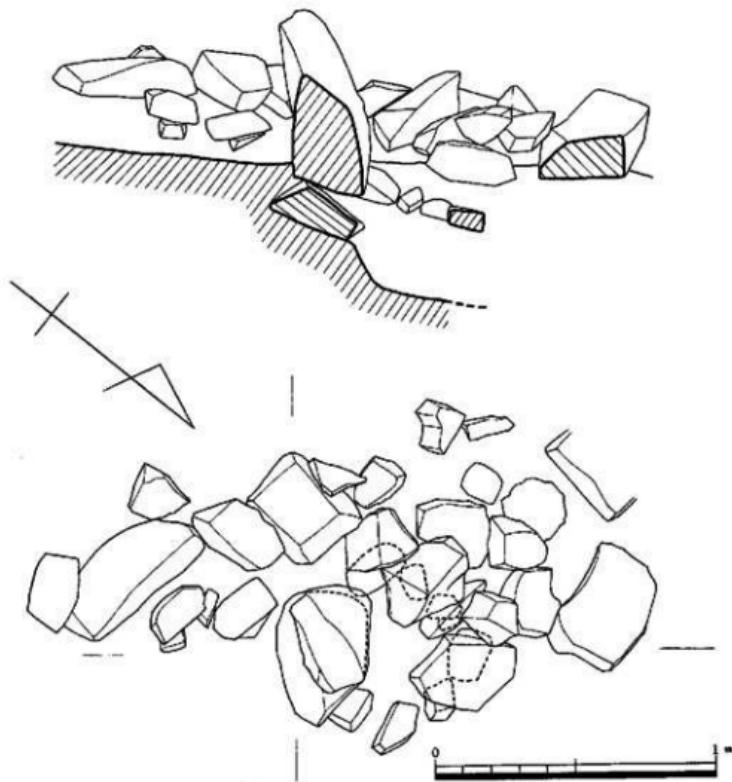
第14圖 1号墳墓実測図

VII 2号墳墓

I 外部構造（第15図）

1号墳の北約8mのところ、北側から丘陵上に上る道の傍にある。丘陵の北側の斜面に位置し、標高67mのところにあるが、山道のために半分は破壊されている。

中央には地表から約55cmの高さの立石が立ち、その周辺には塊石が無秩序に散在している。石は傾斜に従つて置いてあり、そのために南の方が高くなっている。石の配列は規則



第15図 2号墳墓実測図

性をもたず、東西2.20m、南北は半分切られているが、0.90mの抜がりをもつている。

中央の立石は自然石をそのまま立てているだけで、1号墳墓の立石に比べてすんぐりしている。なお、内部造構の直上ではなく、すこしづれて立っている。

石材は立石、周辺の石とも同じく花崗岩である。

2 内部構造

傾斜地にあり、道によって切られているために不明な部分も多いが、1号墳墓と同様な施設であったと考える。すなわちプランでみると小塊石が径50cmの円形に配置されている。とはいって、これが壁の用途をなしているのではなく旧地表に並べただけのものである。その下に地山を掘り込んだ土塁があるが、大部分削られており、大きさは不明である。

3 遺物（第16図）

石積み中から寛永通宝銅錢を1枚

発見した以外には何も見当らなかつた。

寛永通宝には銅錢と鉄錢があり、

初期には銅錢、後期には鉄錢が多く

つくられている。銅錢は寛永3年(16

26年)水(「でつくられたのを最初と

し、明和8年(1771年)佐渡相川で

つくられたのを最後とする。

この寛永通宝は文字がしつかりし

ており、字そのものが肉太である。そして鋸上りは良好で、文字の浮彫りがはつきりしている。裏の周縁は広く、四角孔の跡も広い。特徴的なことは齊の王の部分が右上りになっていることである。また寛永通宝の一般的傾向としては新しくなるに従い、文字が細くなる傾向があり、これらを総合すると寛永年間に鋸造された可能性が強い。



第16図 2号墳墓出土寛永通宝

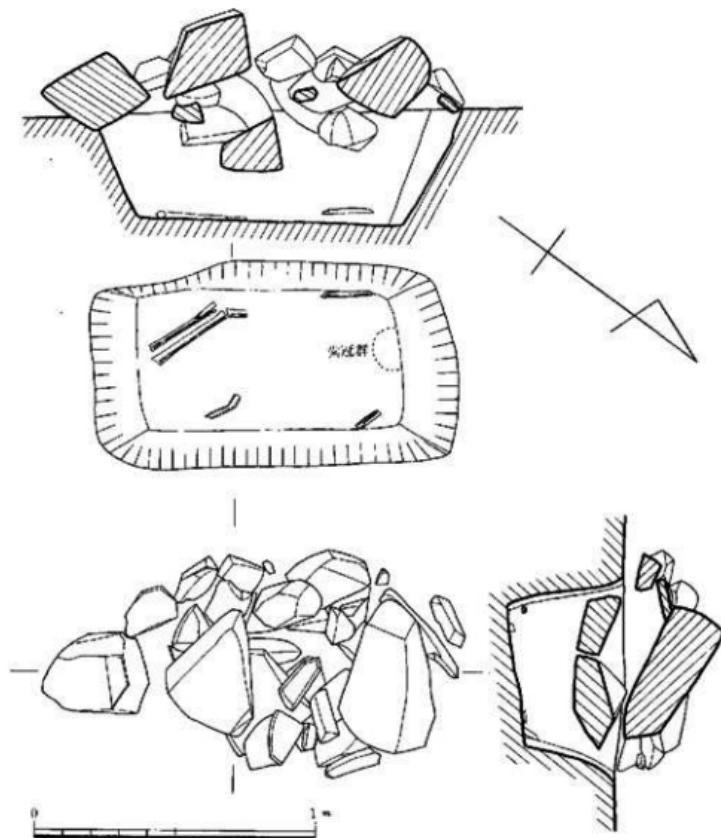
VIII 5号墳墓

I 外部構造（第17図）

1号・2号墳墓と同じく塊石を積み上げているだけである。長軸1.50m、短軸0.75mの楕円状に石が配列されている。しかし周縁に留め石を並べたような形跡はみられない。石の大きさにはきまりはなく大小の塊石を用いている。立石は認められないが、石積みの中央に石のないくぼみがある。或はもともとあつた立石が抜き取られたのかも知れないが、詳細は不明である。石積みは旧地表にのせただけであるが、その範囲は土塁全体に亘っている。

2 内部構造

石積みの下に、埋葬施設の土塗がある。土塗は長軸を北北西に向け、上端で1.30m、下端で0.95m、幅は上端で0.73m、下端で0.50mを計る。土塗は隅が幾分丸くなり、壁が直立せずに、のりの幅が広い。床面は東側がすこし上がりついているが、中心では深さ約0.40mある。遺体を埋葬した土塗としては幅は充分あるが、長さが短かく、伸展葬としては不適当であるが、土塗内からは人骨が発見されている。



第17図 5号墳墓尖削図

3 出土人骨

上端の長さが1.30mの小上括の中から埋葬人骨が1体発見された。保存状態は悪く、四肢骨、歯冠部が若干残存していたのみである。北壁に接した中央部に歯冠部、東、西壁そばの中央より北側に上腕骨、土塙の中央より南に大脛骨が残っており、埋葬遺体は北に頭を向けて埋葬されていたことがわかる。

人骨は男性で、四肢骨の長さから160cmを越えるものと思われる。また年令的には30才台の終り頃と推定される。骨の保存状態は右半身の残りがよく、頭骨片はほとんど見当らない。右前腕骨、左尺骨の状態からして腕は組んでいたものと考える。墓塙の大きさから伸展葬は考えられず、屈葬であったと思われる。すなわち四肢を折りまげ、頭を壁にもたせかけ埋葬したものである。これは歯冠部が北壁に接して見つかったことから考えられる。

残存している骨片は次の通りである。

上腕骨 左右各1 右桡骨1 左尺骨1 右大脛骨1 右脛骨1 歯冠部7

注 入骨について永井昌文氏の説によるものである。

IX 近世墳墓について

飛鳥時代に仏教が受け入れられて以来、仏寺の造営とともに石造物もつくられる。しかしこれは寺院との密接な関係のうちにに行なわれ、寺院外に出てくるのは10世紀頃になってからである。いわゆる供養塔としてあらわれてくる。

塔婆としての石塔は多種にわたり、層塔、多宝塔、宝塔、宝瓶印塔、五輪塔、板碑、笠塔婆、無縫塔、石棒に分類できる。これらが盛んにつくられ始めるのは13世紀になってからで、無縫塔があらわれるのはこの時期である。すなわち無縫塔は禪宗の僧侶の墓塔としての用途をもつもので、供養塔としての性格は弱い。

石塔には供養塔と墓塔とがあり、外見上から両者を区別することは困難である。墳墓に①関係ないものを供養塔呼び、墳墓に関係あるものを墓塔と呼んでいる。両者の違いは遺骸埋葬のあるなしによって決定するのみで墓塔も基本的には供養塔といいう。墓塔が次第に簡略化されて、近世になると純然たる墓碑が断然多くなる。墓碑は石に戒名を刻んだだけで、その上に笠をつけたものもある。

このようにみてくると塔婆に3つの画期があつたことが明確になってくる。

① 9世紀後半で密教が盛になり、藤原氏を中心とした平安貴族の全盛期を迎えるに及んで、現世利益の祈禱仏教の隆盛

② 13世紀以降の禪宗の導入による仏教精神の変革と墓碑としての無縫塔の出現

③ 17世紀以降の庶民信仰の形式と、それにともなう墓碑の広範な出現である。③の画期が現在の宗教観念と結びつく。すなわち江戸時代の初め頃からあらわれ

る墓碑は位碑につらなるものであり、戒名そのものが、墓石という観念を強める。

板碑の祖型については諸説があるが、主流となつているのは五輪塔に祖型を求める説である。^④ 池上年氏は五輪塔から板碑への形態的変遷を論じてゐるが、^⑤ 五輪塔を集約した形が板碑となつたようである。またその形態からしても板碑は容易に墓標としての墓塔へ転化しうるし、ひいては墓石へとつながつていく。そのあらわれ方が、没年時銘塔婆としての板碑の出現である。^⑥

石塔が盛んにつくられるのは鎌倉、室町時代で、銘をもつたものもこの時期に集中している。そして江戸時代に入ると次第にその数を減じ、中期以降になると急激に少くなり代つて墓石が一般的となつて銘文も簡単になり、戒名へと変質していく。兵庫県下の紀年銘をもつ石塔の最終時期は姫路市正法寺五輪塔、同増位山五輪塔、同妙行寺宝鏡印塔、三木市雲竜寺宝鏡印塔、北条町一乗寺宝鏡印塔の慶長18年（1613年）であり、それ以後は見られない。^⑦ 純粹の墓石もほぼこの頃に求められる、板碑も次第に銘を持たなくなり、供養塔としての板碑か、墓標としての墓石かどうかわからなくなつてくる。

江戸時代には徳川家廟や岡山市池田忠雄の墓のように、地上には墓石、地下には石室という形が武士階級では一般的になる。それに対して下層階級の成る部分では金武の浦江谷丘陵のような石をのせたものとなる。

さてこの地の墳墓についてであるが、1号墳墓、2号墳墓をどうとらえるか問題となつてくる。5号墳墓は土塚中から人骨が出土したことから明らかに埋葬施設である。しかし1号、2号墳墓は地上にあらわれている石積みは立石をもつものの5号墳墓と大差ない。けれども地下の構造は小土塚に行き開いたり作つてある。この小土塚を如何に考えるかであるが、火葬骨ならば充分容れるだけのスペースは持つてある。また火葬と土葬の共存は黒田家の墓地にもみられる通りに不自然なことではない。しかも2号墳墓からは寛永通宝が発見されており、その寛永通宝も長期間使用された痕跡は認められてないので、時期的にも寛永年間頃に求められる。とすれば板碑状の立石をもつていても、それは墓標とする方が妥当で、近世墳墓地と考えることが可能であろう。

注 ① 川勝政太郎「墓塔の造立」『新版考古学講座』6 1970

② 舟部清造「塔姿」『新版考古学講座』7 1970

③ 川勝政太郎「前掲書」

④ 舟部清造「前掲書」

⑤ 池上年「福岡市附近における板碑と五輪塔との関係」『考古学雑誌』7卷7号 1916

⑥ 鹿原良志「没年時銘塔婆の発生」上、下『史跡と美術』 349、 350 1964

⑦ 浅田芳朗「攝磨石造遺物古銘資料」 1962

⑧ 島田寅次郎「慶長以後の墓巡につきて」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』12輯 1937

X おわりに

舌状の丘陵上に 2 基の円墳と 5 基の近世墳墓が分布していたが、その内 2 基の近世墳墓は列石の中間に樹木が立っていたために、内部は完全に破壊され、そのために調査することができなかつた。おそらくはこの 2 基も中央に幕標となる立石があつたが、抜き取られ空間ができたために、そこに樹木が茂つたものと思われる。

2 基の古墳は丘陵の稜線上に位置し、北の方水田面から望めば、並列して見える。1 号墳は標高 71m のところにあり、規模も 2 号墳より大きく、当丘陵上の主古墳であることは疑いない。この 1 号墳は盜掘を受けていたために埋葬数、副葬品の在り方など定かではないが、わざわざばかりの須恵器からみれば、築造は 6 世紀後半になされたものと推定される。^① 石室構造に類似のものをさかせば、京都都箕田丸山古墳、佐賀県西脇古墳に見られる。箕田丸山古墳は小田富士姓氏によれば、Ⅲ型式の須恵器を出土しており、6 世紀中葉以降に位置づけられている。これらに共通していることは、長方形プランの玄室に長くはない羨道がつくことである。しかも羨道のつき方が、張り出した袖石の面にそつて並ぶのではなく、一段外に羨道の側壁がつく。1 号墳においても袖石は内へ大きく張り出しているが羨道は、あまり幅を狭めていない。その上に共通していることは羨道部の大井が玄室に比して明らかに低くなっていることである。ただ箕田丸山古墳は石室の構築法において 1 号墳とは異なつていて技法的には古い技法を使つている。

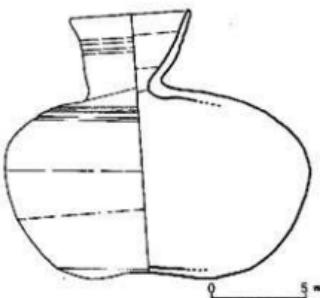
それに比して、2 号墳は保存状態も悪く、全体的に小規模である。石室の石材そのものも 1 号墳に比して小さく貧弱である。しかしプランそのものは長方形プランの玄室に長くはない羨道が続くという 1 号墳と同様な在り方を示すが、羨道の側壁が袖石の面にそろつていている。羨道には閉塞の板石のみが残つてゐるが、非常にしつかりしており、おそらくは三角に積み上げ、石室を完全に密閉していたものであろう。

次に築造の年代をみてみよう。1 号墳出土の須恵器は二型式に分れる。古いものとしては杯蓋、高杯、大形器台がある。杯蓋と高杯は胎土、焼成が全く同じで、おそらく同一窯で同時に焼かれたものであろう。大形器台は羽根戸出土のものが伊勢儀古館に保管されており、時期的にはⅢ A と考えられる。また八女市岩戸山古墳からも出土している。これらと比較してみると時期は下がるようで、Ⅲ B 型式と考えよかろう。それに加えてⅣ 型式の杯身が出土している。このことから須恵器の型式が即築造の年代を示しているとはいえないにせよ、だいたい 6 世紀後半から末にかけて築造、使用されたものと考える。

2 号墳からは時期を決定するようなものは見つからなかつたが、古墳前面の畠の中から表出した須恵器杯身の破片がⅣ 型式のもので 1 号墳に較べると、築造は若干遅れるだろう

が、6世紀末には両墳は並行して埋葬施設として使用されていたことがうかがわれる。このことは群集墳を考える上において重要なことである。

なお、南金武バス停前の水田から牛尾博恵氏が須恵器を採集している。第18図のような平瓶である。おそらくN型式のものと考えられる。



第18図 福岡市金武出土須恵器
(手尾博恵氏藏)

- 注
- ① 小田富士雄「横穴式石室における複室構造の形成」『史徴』100号 1970
 - ② 松尾操作『佐賀県考古大観』 1957
 - ③ 小田富士雄「羽根戸器台」『原始美術』6 1966



(1) 金武古墳群遠景



(2) 1号墳、1号墳墓の関係（調査前）



(3) 1号墳石室全景



(4) 1号墳石室（漢道から玄室を見る）



(5) 2号墳石室全景



(6) 1号墳墓地上遺構



(7) 1号墳墓内部構造



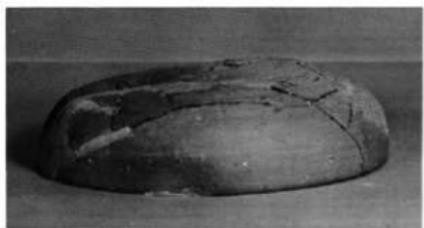
(8) 2号墳墓地上遺構



(9) 5号墳墓地上遺構



(10) 5号墳墓内部構造(土塙並びに人骨出土状況)



1



2



3



4



5



7



6

1、2、3、4、5、6、 1号墳出土

7 南金武バス停前出土
(牛尾博恵氏蔵)



(8) 5号墳墓出土人骨

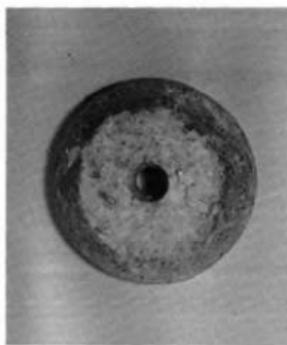


写真左

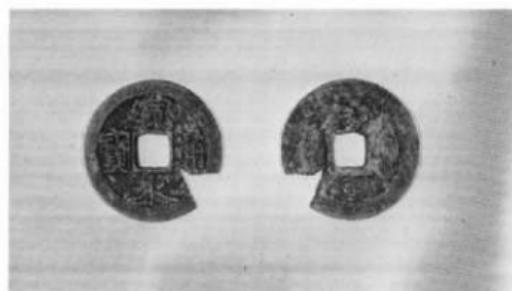
左上：右上腕骨、左下：右桡骨、中左上：左上腕骨
中左下：左尺骨、中右：左大腿骨、左：左胫骨

写真右

上左より：上顎大臼歯・小白歯・小白歯
下左より：下顎大臼歯・大臼歯・小白歯・犬歯



(9) 1号墳出土紡錘車



(10) 2号墳出土寛永通宝

金武古墳群
福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集

昭和46年3月31日

編集 九州大学文学部考古学研究室

発行 福岡市教育委員会

印刷 株式会社 川島弘文社

